

✿ 研究室紹介

飛鳥藤原宮跡発掘調査部史料調査室

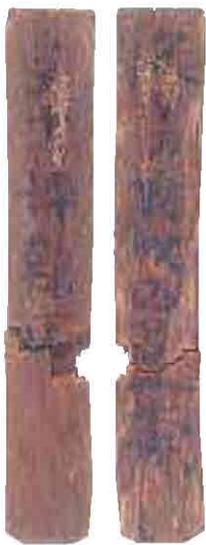
本調査室では、飛鳥・藤原地域の発掘調査で出土した木簡の整理・解読や、遺跡・遺物の文献による検討を主に担当しています。

ここ数年、飛鳥藤原宮跡発掘調査部の手がけた発掘調査では、たくさん木簡が出土しています。飛鳥池遺跡約8000点、藤原京左京七条一坊約13000点、石神遺跡1000点以上、藤原宮朝堂院5000点以上……。

木簡が出土する現場では、木簡の取りこぼしがないうように、土をコンテナにつめて持ち帰ります。その洗浄から私たちの仕事は始まり、木簡の整理・釈読・公表・保管という流れをたどっていきます。(奈文研ニュースNo.11の研究室紹介をご覧ください。)その具体的な仕事内容は、たいへん根気のいる仕事です。

飛鳥・藤原に都がおかれた7世紀は、律令国家が建設されてくる重要な時期にあたります。そのため、同時代史料である木簡には大きな期待がかかっています。古い時期の木簡であることから、しばしば「日本最古の〇〇」に関する史料となり、注目を集めたりもします。石神遺跡で出土した「日本最古の暦」の木簡は、記憶に新しいでしょう。

また、一見地味な木簡から、意外な事実が知られることがあります。写真の木簡は「(表) 多土評難田 (裏) 海部刀良佐匹部足奈」と書かれており、7世紀段階に、後の讃岐国多度郡に「難田」(カタ



(表) (裏)

石神遺跡木簡

ダ) というサトがあったことがわかります。空海の出身地を記した史料に「方田郷」(カタダノサト)がみえますが、まさに同じ地名でしょう。従来「カタダ」と記された古代史の史料は他に知られていなかったため、空海の出身地は「弘田郷」ではないかといわれてきましたが、再検討の余地がでてきたといえるでしょう。ちなみに、「佐匹」は「佐伯」のことです。空海が佐伯氏出身であったことが想起され、興味は尽きません。

(飛鳥藤原宮跡発掘調査部 市 大樹)